

2020 年度

東北学院大学外部評価報告書

2021 年 3 月

東北学院大学外部評価委員会

目 次

第4期東北学院大学外部評価 概要.....	1
2020年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について	2
I. 2020年度東北学院大学外部評価に係る質問票	4
II. 外部評価委員による所見	10
III. 2020年度東北学院大学外部評価委員会の総評	19
【参考資料】	22
① 2020年度東北学院大学外部評価委員会 名簿.....	22
② 東北学院大学外部評価委員会規程.....	23
③ 2020年度東北学院大学外部評価委員会 議事録（第1回）	25

第4期東北学院大学外部評価 概要

2021年3月19日外部評価委員会

第4期東北学院大学外部評価 概要

1. 第3期外部評価委員会からの引き継ぎ事項

学生を含めた様々なステークホルダーからのアンケートやヒアリングを行うことを考えつつ、改善・改革に向けた取り組みを進める必要がある。とりわけ、指摘されている「学力差」問題、「キャリア教育の拡充」、「読解力向上」に向けた、教育の質保証に資する改善・改革に向けた取り組みに着目する。

2. 第4期外部評価の概要（点検・評価委員会提案）

中教審において「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（平成30年11月26日）が提示され、「教学マネジメント」に係る指針の策定や学修成果の可視化に向けた動きが強まっていることを踏まえた外部評価を実施する。

したがって、第4期では「教学マネジメント」の運用体制を外部評価の対象としたい。

- ① 評価年度：2019～2021年度
- ② 調査対象：東北学院大学における教学マネジメントの運用状況
- ③ 評価方法：報告書及び対応状況をまとめた資料を基に大学に対する指摘、助言等を行う。また、必要に応じて学内外関係者等にヒアリングを行うことがある。
- ④ 評価項目：大学の改善に向けた実施状況及び体制等

3. 2020年度外部評価概要

2020年6月25日（木）開催の東北学院大学点検・評価委員会において新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を鑑みて、状況に応じた書面評価と対面評価による外部評価を行うことを第4期外部評価委員会に付託することとした。

これを受けて2020年度外部評価委員会では、新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により実施された「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援について」状況を把握し教育課程の実施状況と修学支援状況について事前の書面質問と回答による評価と対面（ハイブリット参加を含む）による各部局へのヒアリング調査を実施した。また、東北学院大学では2023年度に五橋キャンパスへの移転を控え「東北学院大学アーバンキャンパス計画について」について外部評価委員会の視点で新キャンパスへの期待と要望を大学に提示することとした。

4. 2021年度以降の外部評価

東北学院大学では、2019年度より学修成果を可視化するために大学生活で培われる「問題を解決する力」を測定・評価するアセスメントテストによる直接評価を実施しており、それらを踏まえて教学マネジメントの観点からその概要について外部評価を実施することを検討する。

以上

2020 年度東北学院大学外部評価委員会の活動及び報告書について

2021 年 3 月 19 日
東北学院大学外部評価委員会

1. 東北学院大学外部評価委員会

東北学院大学外部評価委員会（以下、「本委員会」という。）は、東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、東北学院大学に設置された委員会である。本委員会は、学外の第三者による外部評価を実施する委員会であり、評価を通じて、同大学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行うことを目的としている。

2019 年度より第 4 期となる本委員会は、杉本和弘東北大学高度教養教育・学生支援機構教授を委員長として、2019 年度に発足した（任期：2019～2021 年度）。構成員は、下記のとおりである。

- 委員長：杉 本 和 弘（東北大学高度教養教育・学生支援機構教授）
- 副委員長：木 須 八重子（元公益財団法人せんだい男女共同参画財団理事長）
- 委員：合 田 隆 史（尚絅学院大学学長）
- 委員：宮 原 育 子（宮城学院女子大学現代ビジネス学部長）
- 委員：高 橋 新 悦（仙台市副市長）
- 委員：八 浪 英 明（株式会社河北新報社 常任監査役）
- 委員：阿 部 智（宮城県仙台三桜高等学校 校長）

2. 第 4 期外部評価の概要

中教審において「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018 年 11 月 26 日）が提示され、「教学マネジメント」に係る指針の策定や学修成果の可視化に向けた動きが強まっていることを踏まえた外部評価を実施する。

したがって、第 4 期では「教学マネジメント」の運用体制を外部評価の対象としたい。

- ① 評価年度：2019～2021 年度
- ② 調査対象：東北学院大学における教学マネジメントの運用状況
- ③ 評価方法：報告書及び対応状況をまとめた資料を基に大学に対する指摘、助言等を行う。また、必要に応じて学内外関係者等にヒアリングを行うことがある。
- ④ 評価項目：大学の改善に向けた実施状況及び体制等

3. 2020 年度外部評価の活動及び評価の方法

本委員会は、「東北学院大学外部評価委員会規程」に基づき、2020 年度外部評価を実施した。

評価はテーマ A「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援について」、テーマ B「東北学院大学アーバンキャンパス計画への外部評価委員会からの期待と展望について」書面調査と 2020 年 12 月 3 日開催の第 1 回外部評価委員会において関連部署に対して

況を把握しヒアリング調査を行った。なお、第1回外部評価委員会及び第2回外部評価委員会ともに対面及び遠隔会議システム（Zoom）を利用したハイブリッド参加方式にて実施した。

2020年度外部評価活動スケジュールの概要

日 付	活動内容
2020年11月17日（木）	外部評価委員に対し2020年度外部評価委員会実施要領及び書面評価資料及び質問票の送付
2020年11月17日（木）～30日（月）	外部評価委員会からの質問票集約 学内各部局による回答作成
2020年12月3日（木）	第1回外部評価委員会開催 外部評価委員からの質問状に基づき、2017年度大学評価の指摘事項に関するヒアリング
2020年12月3日（木）～2021年1月5日（火）	外部評価委員による評価所見作成
2021年2月15日（月）	外部評価委員会委員長より総評の提出
2021年2月～3月15日（月）	『2020年度東北学院大学外部評価報告書』編集
2021年3月19日（木）	第2回外部評価委員会開催 『2020年度東北学院大学外部評価報告書』を大学に提出

3. 本報告書の構成

本報告書は、下記の通りに構成されている。

- I. 2020年度東北学院大学外部評価に係る質問票
- II. 外部評価委員による所見
- III. 2020年度東北学院大学外部評価委員会の総評

【参考資料】

- ① 2020年度東北学院大学外部評価委員会 名簿
- ② 東北学院大学外部評価委員会規程
- ③ 2020年度東北学院大学外部評価委員会 議事録（第1回）
- ④ 事前評価資料（テーマA及びB）

I. 2020 年度東北学院大学外部評価に係る質問票

■テーマA 「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援について」

質問区分	質問内容	TG 回答者
①遠隔型授業の実施プロセス	<p>今年度突然必要となった授業オンライン化に際し、「遠隔授業実施サポートチーム」が果たした役割は極めて大きかったと思う。その取り組みに敬意を表したい。</p> <p>そこで関連して、オンライン授業が常態化する中で、学生、特に1年生や他の学年でも孤立しがちな学生をどのように発見し、ケアをしているのか。リスクを抱えがちな学生をいち早く見つけ出すような機会や場の設定はあるのか、お聞かせください。</p>	<p>【遠隔授業実施サポートチーム】 稲垣学長特別補佐 加藤学務部長 志子田学長室長</p>
	<p>オンライン授業の教材づくりにおいて、限られた時間や条件の中、最大限の学習効果が得られるための工夫をされたことに敬意を表します。様々に工夫された中で、学内で広く活用されたり、評価に値することなどがありましたら、ご紹介ください。</p>	
	<p>IT環境の均等化は、欠くことができないと考えます。学生に貸与されたPCやルーターなどの機器はおおよそどれくらいで、貸与を受けたのは全学生の何%くらいになるのでしょうか？</p>	
	<p>・インターネット環境が確保されていない学生に対し。今回は学内からPCやルーターを集めて貸与という形で対応しましたが、将来的な準備や対応策はどの様に考えていますか。</p>	
	<p>今回の遠隔型授業の実施については、前期から教職員と学生がともに取り組んできたことがよく分かりました。マニュアルも学生の立場に立って作成されており、大規模大学に関わらず、コロナ禍での対応がしっかりされていることに感銘を受けました。</p> <p>質問としては、特に非常勤講師の方々が今回のコロナ禍でどのような対応をされたか、また遠隔型授業を実施される際の困難などについて、概要を知りたいと思います。</p>	

①、②	<p>全体に迅速で丁寧な対応をされていると感じた。オンタイム、オンライン授業など、それぞれに対する反応も、ポジティブ、ネガティブに分け、その傾向が分かった。あえて一つ伺うとすれば、それぞれの学生の自宅での受講環境の差について。実際のトラブル事例など、対応に苦慮したケースなどはなかったのか。学生側の環境の違いへの配慮という点で、大学だけではなく社会全体（たとえば行政などの支援）でカバーすべきこと、できることはあるのだろうか。</p>	加藤学務部長
①、②	<p>後期になって、一部対面授業も取り入れられていますが、対面授業の実施状況とオンライン授業との時間的なバランスをどのように取られていますか？ 特に後期に遠隔地からの学生が通学する場合、学年ごとに通学しない日を設ける等、学生の動きを勘案した時間割などはありますか？</p>	
①、②、③	<p>今年度前期の学生の学修成果をどう見ておられますか。例年と比べ、違いはあるでしょうか。</p>	千葉学務担当副学長
①、②、③	<p>質問1について、学修成果に違いがある場合、その原因をどう分析しておられますか。</p>	
①、②、③	<p>質問1について、学修成果に改善の余地があると考えられる場合、具体的にはどのような方策をお考えでしょうか。</p>	
②学生アンケートの結果に基づく改善施策	<p>遠隔授業の導入時は、不安が先行し様々な意見や要望が出されることは自然なことで考えます。また本調査を通じて学生のニーズを把握できたことを前向きに捉え、丁寧且つ迅速に対応することがFD推進委員会の目的とも合致すると考えます。</p> <p>但し、懸念されることは大学生生活に憧れを抱きつつ入学してきた1年生が対面授業を受けられず、本学生としての実感がないまま、孤立感や孤独感を募らせてしまっているということ。私立大学としての特色ある人材育成を考えた中で、今後どのようにフォローしていくのか具体策があれば伺いたい。</p> <p>大学生生活は専門性を高めること（専門的知識と技量の修得）は当然として、同時に学生個々人が人間としての知見を高め、視野を広げるといふ貴重な機会・時期でもあると考えます。</p> <p>大学における様々な活動が制限を受ける中で、学位プログラムの質保証と共に、大学として充実した学生生活実現のための「機会」を如何に確保していくのか、今後の方針等を伺いたい。</p>	千葉学務担当副学長

	全学 FD と学部 FD との関係（位置づけ・組織）が分からないので、教えて下さい。	
②学生アンケートの結果に基づく改善施策	今回のコロナ禍にあっても、FD を繰り返し、学生の学びへの質保証を意識しながら、遠隔授業を展開されていることが分かりました。また学生へのアンケートも実施されて軌道修正を行いながら、授業に反映されていることも分かりました。質問 1 にも関わりますが、FD は、非常勤講師も参加されていますか？	中沢点検・評価 担当副学長
	不安、不満の多くは、コミュニケーション上の問題に起因しているようだが、もう一つ感じたのは講師側のスキルアップにより、解決できる課題が多かったのではないかということ。たとえば、講義の長さ・短さのばらつき。聞き取りづらさ。資料の作成・提示の仕方、課題の出し方。さらには成績評価の方法が「見えない」ことへの不安。教員対策として資料にないものがあれば、お聞かせいただきたい。	
③遠隔型授業以外の対応	コロナ禍の中で、入学し、学生生活が大きく変わる 1 年生に対し、学生生活、授業それぞれに、大学として最も配慮されたことはどんな点でしょうか？ 半年、遠隔授業を実践されてきた経験も踏まえて、ご教示ください。	千葉学務担当 副学長
③遠隔型授業以外の対応	コロナ禍以前から、奨学金の返済が学生の経済的負担になっていることが指摘されていましたが、今回の「緊急経済支援」のうち、コロナ禍の状況を受けて、返済条件が免除、あるいは軽減となるなどの措置をとっている奨学金制度は設けられているのでしょうか？	千葉学生部長
	学生からの相談は、例年と比べるとどのような違いがありますか？ また、退学者はでていないのでしょうか？コロナ禍の影響はいかほどでしょうか？	
	学生と保護者の立場にたって、様々な支援メニューの情報提供が行われていますが、授業以外のコロナ対応について、学生や保護者から意見を聞く機会がありますか？ 保護者は、どのような不安を抱えていますか？	

	<p>様々な学生支援策を用意していることは分かったが、学生の実際の利用状況がどうなのか傾向を知りたい。たとえば、経済的な支援を求めている人はどれぐらいいるか、健康面やメンタル面で相談を持ち掛けている学生は、どの程度いるのか。その深刻度はどの程度か、など、可能な範囲で知りたい。</p>
	<p>授業以外の学生活動(サークル・部活)への支援は対応したのですか、教えてください。</p>

■テーマB 「東北学院大学アーバンキャンパス計画について」*キャンパス統合に期待する効果など

	意見内容 (または質問)
地域に開かれた大学として	<p>2023年のキャンパス統合は、貴学の歴史にとって大きな画期となるだけでなく、仙台市、宮城県、そして東北地方の高等教育にとっても新たな時代を画するものになると確信している。そこで、「コンセプトシート」に記載された下記の点について、現時点で構想されていることがあればご説明いただきたい。</p> <p>□「教養教育型の総合大学」あるいは「学問領域を超えた多様な学び」とあるが、(学部集約による物理的近接性を越えて)具体的にどのような組織体制や仕掛け・工夫によって実現できるとお考えかお聞かせいただきたい。</p> <p>□「地域に開かれた大学」とあり、五橋におけるキャンパス統合は立地の利便性を活かし、地域住民や社会人向けの「リカレント教育」を展開・強化する契機となり得ると思う。本格的な少子高齢化時代に突入しつつあるなか、リカレント教育に関する貴学の戦略はどのようなものがあるか。教育ニーズ調査や既存センターの改廃を含む組織改革等の構想・計画があればお聞かせいただきたい。</p> <p>(以上について、企業秘密であれば無理にお答えいただかなくとも結構です)</p>
	<p>東京都内においても、私大が郊外から都心部へ回帰する流れがあります。東北の中心都市仙台市の中心部に東北最大の私学である貴学が新たなキャンパスを誕生させることは、様々な計り知れない波及効果があるものと思われまます。同時に地域社会における存在感がなお一層高まることでもあります。今後「地域に開かれた大学」として、産・学・官連携等様々な事業についての今後の方針を伺いたい。</p>
	<p>【個別：学徒仙台の交流拠点】</p> <p>① 目指すべきキャンパスとして「地域に開かれたキャンパス」と「地域と共創するキャンパス」を掲げていますが、具体的な展開(推進)方策をどの様に考えているのか教えてください。また、その展開のなかで学生に期待する役割についても教えてください。</p> <p>② 私としても、様々な地域の活動に若い力や知識を有した学生が参画することは、仙台市の活性化につながることから、大いに期待するところです。</p>

	<p>①「地域と共創」「市民に開かれた」の具体的な展開方法について。まず、地域とはどのエリアを指すのか、どのように共創しようと考えているのか。大学の外から、中に住民を招き入れようとしているのか、あるいは学生・教員が街中に出て共生（活動）するイメージなのか、など。</p>
ひとつのキャンパス	<p>五橋キャンパスは土樋キャンパスと合わせてひとつのキャンパスというコンセプトになっていますが、特に土樋キャンパスの役割はどのように変化していきますか？</p>
	<p>②土樋と五橋を、どのように「一体的なひとつのキャンパス」にしていくのか。近いとはいえ、実際には間にいくつもの障害物がある。単に講義を受けるために往來することを言っているわけではないと思う。</p>
	<p>【個別：新キャンパス】</p> <p>① 新キャンパスの目指すものとして、学院時報での原田理事長様の挨拶では、キャンパスコンセプトとして五つ述べられており、シートに掲載（使用）すべきと考えます。</p> <p>② 但し、五つのキャンパスイメージを議論し、大学内で共有した上で、掲載する必要があると考えます。</p> <p>③ 土樋と五橋キャンパスを一体的な「一つのキャンパス」とすることを目指すとあるが、ハード面（歩行者回廊・駐車場等）とソフト面（学部学科・学年別の大学運営等）でどの様に考えているか教えて下さい。</p>
企業連携	<p>③同じ五橋にある会社からみて、一番ありそうで、かつ心配なのは、学生たちが周辺を素通りすること。たとえば、地下鉄五橋駅から仙台駅に出してしまえば、地上の店や会社などの前すら通らない。かといって、単に「回遊」を促しても、それは学生の本分とは異なる。周辺の企業などに対し、大学や学生が求めるものは何なのだろう。どうすれば「共創」になるのか、大学から地域や企業に求める意見を伺いたい。</p>
コンセプトイメージ	<p>【全体】</p> <p>コンセプトシートにおいて、施設・学生・市民と役割・機能・連携等の視点を組み合わせて概念的に表現出来ないでしょうか。使用しているイメージパースはきれいですが、内容は施設説明が主の様に感じます。</p> <p>例えば、目指すべきキャンパスや交流拠点としての役割などを概念図で表現した上で、イメージパースに繋がればと思います。</p> <p>現下のコロナウイルス感染症の中で、国が積極的に進めているデジタル化に関してシートに、学院大としての今後の取組みを記載すべきと考えます。</p>

教育研究	<p>【個別：新たな学びの舞台】</p> <p>① 「キャンパス統合により学生たちは、学問領域を超えた多様な学びができる」との記述があるが、どの様なことを考えているか教えて下さい。文系と理系の学生・院生が連携した研究や勉学も想定しているのであれば、打ち出すべきと考えます。</p> <p>② 留学生(外国人)の方々の積極的受け入れは考えていますでしょうか。教えて下さい。</p>
泉利活用	<p>【その他】</p> <p>① 市議会の中でも取り上げられていますが、泉キャンパスの今後の活用について、計画があれば教えて下さい。その方策によっては、地下鉄南北線で結ばれ、土樋・五橋と連携したサテライトとも考えられるかもしれない。</p>
その他	<p>新キャンパス計画が着々と前に進まれていることにお喜び申し上げます。一万人を超える若者が学ぶ、ちょっとした町のような規模のゾーンが市街地に誕生するというポテンシャルばかりでなく、大学が施設、教育や研究といった知的資源も含め地域に開放していくことを目指されている姿勢への期待は大きいと思います。</p> <p>オープンを予定している周辺の地域はこれまでも地域コミュニティの活性化に長く取り組んできた実績のある地域でもあります。コロナ禍という予測できない状況で、コミュニケーションの形はしばらくは、従前とは異なってしまわざるを得ませんが、大学と地域、学生と地域の交流、相互理解を深めながら 2023 年を迎えられますことを期待しています。</p>
その他	<p>一極集中是正の観点も踏まえれば、貴学に求められているのは、地域に開かれた大学ということもさることながら、東北の優秀な学生が東京圏の大学に流出することのないような、あるいは東京圏を含む全国から学生が集まる大学づくりだと思います。そのことは、在仙の他大学の発展にもつながるものと考えております。その大きな一歩として、今回のキャンパス統合に大いに期待をしております。</p>
その他	<p>この度は、五橋キャンパスの起工、誠におめでとうございます。コロナ禍の中で、大変明るいニュースとなりました。五橋キャンパスのコンセプトシートを拝見して、このキャンパスが今後の東北学院大学のコアになるばかりでなく、仙台市民にとっても開かれたアカデミズムの場としての期待が大きいことも分かりました。キャンパスの整備後は、学生にとっても通学しやすく、また、JR 仙台駅から人の流れが五橋方面につながっていくことで、背後の荒町商店街などにも、若い学生たちの姿が見られるようになるといいなと思いました。</p>

※東北学院大学へのヒアリング内容は議事録に記載する。

II.外部評価委員による所見

■テーマA 「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援について」

【①遠隔型授業の実施プロセス】

評価者①	<ul style="list-style-type: none">・ コロナ禍のため、私がかかわる財団法人の社会教育事業も中止や延期を余儀なくされ、自主的な市民活動も施設利用の制限により縮小を余儀なくされる事態が長く続いています。<p>身近に見聞きする義務教育の現場では、再開されたとはいえ、児童たちの学校生活の制約や学校行事の中止が続いています。仲間や社会とのつながりといった教育の一環で、今児童たちが体験していることには、東日本大震災の体験にも共通するものがあり、この影響も長きに及ぶのではないかとさえ思えます。</p><p>民間における IT 環境の整備は一律に整っているわけではなく、その差は大きいと推測します。意外と思われるかもしれませんが、仙台市も関連する関係機関も IT 環境の整備はそれほど進んでおりません。</p><p>そのような状態で、今回遠隔型授業の実施をはじめとしたコロナ禍の一連の取り組みをうかがい、いくつかの点で認識を新たにしました。</p><p>社会全体の中では、押しなべて高等教育機関は、IT 環境の整備が進んでいるのかもしれませんが、状況をいち早く判断し、一万人を超える学生を対象に遠隔で授業を提供するという取り組みを進められたことは、まず、高く評価されるものと受け止めました。</p><p>また、「一人の学生も迷うことのないよう、学業や課外活動を通じて、人間的な成長を体感できる学生生活を提供する」といったミッション明確にし、学内の取り組みを進められたことや学生や保護者にもメッセージを伝えるとことにも力を注がれたことで、大学に関係する方々の信頼関係を強められたと考えます。コミュニケーションのあり様が変わらざるを得ないからこそ相互の基盤を強めるもの、つなぐものを共有することは欠くことができないと思います。</p><p>残念ながら、行政や政治からこの困難を乗り越え、将来への不安を減らすような力強いメッセージは伝わっていません。本来であれば、企業や団体、行政にも求められているはずのそれぞれのミッションも今、見えません。</p><p>コロナ禍への対応を緊急事態言前から、いち早く準備されたことに始まり、この一年をどのようにして高等教育機関としての責務を果たすのか、といった貴大学の一連の丁寧な取り組みは、ポストコロナ時代へ向けた新しい学び方の知見の蓄積につながるものと期待いたし、取り組みを心強く感じました。</p>
評価者②	<ul style="list-style-type: none">・ 与えられた環境条件下で、適切に対応されていると思います。

<p>評価者③</p>	<p>評価できる点：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遠隔型授業の実施に際しては、学内に「遠隔授業実施サポートチーム」を設置し、学生の状況に応じて IT 機器の貸し出しや、学生へのアンケートからの情報収集ときめ細かな対応に務められ、学生への修学をしっかりと確保されてきた。 ・ 非常勤講師に対して、遠隔型授業への準備金やガイドの配布、教職員の掲示板を通じて、遠隔型授業への準備と情報の共有が図られている。 <p>今後の課題：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 昨今の感染症拡大の進行に伴って、来年度の授業においても遠隔型と対面のふたつのタイプは併存すると思われる。在学生については、遠隔型授業への慣れと、ひとりで学ぶ環境が、修学のモチベーションを下げる可能性も考えられるので、学生が大学で学んでいることを自覚できるような授業内容や、全学、学部でのオンラインイベント等も必要になると思われる。また学生アンケートのように、学生の声を聴く機会を持つことは重要だと考える。 ・ 来年度の新入生に対しては、今年度の経験を生かして、入学者が確定した都度に、大学での遠隔型授業の様子や学生側で準備をしたほうが良いと思われる機器の紹介など、遠隔型授業に向けた具体的な情報提供が望まれる。
<p>評価者④</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全般的な所見としては、大学側の対応を報告頂いたが、急展開したコロナ感染症拡大に伴う教育環境の変化に、学生や保護者への気遣いを含め、スピード感を持って適切に進めたことを評価致します。 <p>オンラインによる授業導入により、学生にとっても先生方にとっても、様々な課題が表面化し、その都度に対応をしたことは、大変な御苦労であったと推察いたします。この先の展開が読めない部分もありますが、今回の経験を踏まえて、新年度に向けて、前後期のカリキュラム設定や対面(ハイブリット参加含む)・オンタイム・オンデマンドの各授業のバランスなど計画的な対応を望みます。</p> <p>PC やルーターが無いなどインターネット環境が未確保の学生への機器の貸与支援は、スピーディーな対応であり、評価いたします。また、令和3年度からは新入生全員に PC を持たせるとともに、通信環境のサポートも進めていく予定と伺っており、よりデジタル的な対応が進むものと期待します。</p>
<p>評価者⑤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠隔授業実施のため、可能な限りの支援を行っている点は評価できる。 ・ 学生に Wi Fi を貸し出したところ圏外だった、オンタイム授業と対面授業を交互に受講しなければならない学生へのケアが課題だった、等、苦労した事例を伺うことができ、コロナ対策の苦労の様子が具体的にイメージできた。 ・ 今後の課題として 2 点指摘したい。

	<p>① コロナ禍収束には長期化が予想され、遠隔授業と対面授業の併用は次年度も続く。むしろ、こうした授業形式が今後のスタンダードになるというぐらいの覚悟で、態勢を整えていくべきと思う。</p> <p>② 大規模大学としては、どうしても目が届かない部分が出てくる。特に、デジタルデバイドを防ぐための指導・工夫やメンタル面でのカバー（学生を孤立させないような）を手厚くすることなどが肝要と思う。優秀な学生はどのような場合でも対応できると思うが、そうでない学生の場合、一つの躓きが脱落につながりやすい。小さなサインを見逃さないきめ細かな対応を望みたい。</p>
評価者⑥	<ul style="list-style-type: none"> 評価できる点 全体的に学ぶ側の視点に立った丁寧且つ的確な対応がなされています。マナバ等を有効に利用した取り組み、毎月の学科長への連絡・報告態勢、学生の環境設定等への配慮等も適切であると考えます。 今後の課題 長期的観点で考えれば「学生の意欲・主体性や集中力の維持」や「学生のリアクションをより引き出す」工夫が求められてくるはずで、対面、オンタイム、オンデマンドそれぞれ長所の統合及び進化による付加価値の高い学習機会の創出が強く要求され、他大学との差別化の指標として捉えられていくのではないのでしょうか。

【②学生アンケートの結果に基づく改善施策】

評価者①	<ul style="list-style-type: none"> 遠隔型授業における集中力の維持、リアクションの引き出しや双方向性の授業の可能性といった探求に大変関心を持ちました。それは、高等教育に限らず、義務教育、社会教育においても重要な視点になるからです。 アンケートはこれらの検証、具体的な改善策の実施に結びつくばかりでなく、学生と大学の双方向のコミュニケーションを深める副次的な効果もあったと思います。引き続きできる手法で、検証と改善を図られることを期待します。 改善策の中で、教える側のスキルレベルの向上と質の保持は重要な要素と考えます。教員への呼びかけについては各人の自主性を尊重しつつも、「お願い」や「依頼」よりは（ミッションの共有が前提ですが）「～をしていただきたい」という「要望」や場合によっては「指示」という姿勢で臨まれてもよいのではないかと考えます。
評価者②	<ul style="list-style-type: none"> 本学でも同様の課題を抱えております。地道に取り組んでいくしかないと思います。
評価者③	<p>評価できる点：</p> <ul style="list-style-type: none"> FD を繰り返し、学生の学びの質保証を意識しながら、遠隔型授業を展開している。その際に学生へのアンケートを実施して、軌道修正を行い

	<p>ながら授業に反映させている。</p> <p>今後の課題：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 在学生については、次年度が 2 年目の遠隔型授業になる可能性が高く、初体験だった今年の授業とは異なる状況や意見が出されると思われるので、次年度も継続して学生アンケートの実施が望まれる。 ・ 非常勤講師についても、授業の質を上げていくために学生からのフィードバックや最新の情報共有も必須であると思われるので、非常勤講師へのアンケート実施や、情報提供を進めて、サポートをすることも必要ではないかと考えた。
評価者④	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠隔型授業の受講状況調査において、新入生の回答数が格段に多かったのは、それだけ学生生活への不安や不満があることが分かりました。この学生達が 2 年生になった時に、普通のキャンパスライフが過ごせる様に、知恵を絞って頂くことを期待します。また、健康メンタル面での相談件数が増加傾向にあるとの報告もありましたが、引き続き、学生の大学での目標や充実感の喪失等が発生しない様、健康メンタル面へのフォローの充実をお願い致します。 ・ コロナ禍により、新たな大学生活の取組みを進めている中で、学生並びに保護者の方々への意見聴取は、現状を認識する上で必要なことであり、学生生活に対する認識を、教員の先生方と共有することが重要なことと考えます。
評価者⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートで気になったのは、教員の「スキル格差」だったが、大学全体でフォローし、当該教員を指導しているとのことだった。オンタイムやオンデマンド授業への慣れ、習熟は教員の側こそ必要な要素。引き続き、意識を高く持って指導にあたってほしい。
評価者⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・ 評価できる点 まず、6 月下旬という早い段階で調査を行い、改善策に結びつけようとするスタンスは適切と考えます。その結果を踏まえ迅速に修正し、授業へ反映させている点。 ・ 今後の課題 対面授業が最善であることに疑いはありませんが、刻々と変化する地域社会の感染状況を踏まえながら、大学教育としての特性を加味した判断が必要で、極めて難しいものと思います。但し遠隔授業は対面授業を単にオンラインに置き換えたものではなく、学びやすい授業を多角的に検討し、作り直していく契機と捉えられればと考えます。

【③遠隔型授業以外の対応】

評価者①	<ul style="list-style-type: none"> ・ コロナ禍による経済的困窮を緩和するための支援策も拡充され、活用されているとのことで、学業以外の生活環境への配慮も丁寧に取り組まれていると考えます。
------	---

	<p>一方で、退学者や学生相談の件数は増加している状況ではないということでしたが、すぐに出る困難と今後目に見えてくる潜在的困難もあると思います。</p> <p>専門機関である学生相談、生活全般にわたって学生にかかわる事務局も含め、それぞれの機関が連携して、学生本人や保護者が不安を少しでも減らし、教育をうけることができるよう引き続きのご尽力を期待いたします。</p>
評価者②	<ul style="list-style-type: none"> 遠隔か対面かという軸で語られることが多いのですが、それが問題の本質ではなく、遠隔であれ対面であれ、いい授業を提供できているかどうか大切なのだと思います。 <p>本学ではこれまで、感染症対策で「やむを得ず」ではなく「対面を大切にしながら、非対面の良さを採り入れて、より良い教育を目指す」ということでやってきました。主観的というか情緒的ですが、「学生から見て、教職員は大変な状況の中でも学生のためによくやってくれている、遠隔授業でもしっかり実力が身につけている、と思えるかどうか」が焦点だと教職員には伝えていきます。</p> <p>その意味で、本学では、何らかの事情で問題を抱えてしまった学生のケアが、対面指導の機会が限られているため難しいという課題を抱えています。いずれ各教員の経験を持ち寄って、ノウハウを共有するためのFDを行いたいと思っています。</p>
評価者③	<p>評価できる点：</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生と保護者の立場にたって、様々な支援メニューの情報提供が行われている。支援については、コロナ禍での学びの不安の解消に努められ、また、授業料の支援に加えて、学食のランチの価格の変更など、大学としてできることを実践されている。 <p>今後の課題：</p> <ul style="list-style-type: none"> 今年度は学生相談のうち、メンタルに関する相談が増えたとのことであるが、コロナ禍の中で、ひとりで学ぶ機会が多いことや、現在の生活維持と将来の進路などの不安もさらに大きくなると思われる。大学としても、学部単位でもこれまで以上に学生や保護者とのコミュニケーションが重要になってくると思われた。
評価者④	<ul style="list-style-type: none"> 大学生活において、授業以外のサークルや部活動等も重要な時間であると認識しており、6月以降順次、クラブの全国大会への派遣や、新入生と先輩との意見交換の場の設定、大学祭のオンライン開催、課外活動関係のプレゼンテーションなど、コロナ禍の中においても、出来るだけの支援（対応）を行っていることは、評価されます。今後も、状況の変化に応じた取組みが求められますが、柔軟な御対応を願います。
評価者⑤	<ul style="list-style-type: none"> 奨学金制度をはじめ、授業料を半額にする緊急給付金制度、低額での食事提供など、経済的な支援はかなり手厚く行っているとの印象を持つ

	<p>た。また、メンタル面での相談件数も、特に増えているわけではないとのことだったので、まずは安心した。これらの問題はむしろこれから深刻化してくることも予想されるので、引き続き注意願いたい。</p>
評価者⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・評価できる点 オンライン上でのオリエンテーションの実施やその他経済面を含めた様々な学生支援策を用意していること。 ・今後の課題 漠然とした不安感や焦燥感を持つ学生、保護者が増えている状況を鑑み、経済面にだけに軸足を置かない学生支援策の拡充が必要ではないでしょうか。既にストレス耐性に弱いとされる小中学生段階では様々な問題が発生しています。今後学生段階にまで及ぶ可能性もあり、適時適切なアンケート調査の実施等を考えるべきと思います。

■テーマB 「東北学院大学アーバンキャンパス計画について」

【事業計画に期待する効果、要望等】

評価者①	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仙台は「学都」と呼ばれていましたが、東北大学の青葉山への集約や他大学の市外への移転など、中心市街地から大学が無くなって、近年「学都」の実感が乏しくなっているように感じています。 今回のキャンパス統合によって、中心市街地に学生が戻ってくることや社会人にとって学び直しやリカレント教育が受けやすくなることで、学都イメージが膨らむのではないのでしょうか。 また、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」は、その実績を重ねてこられました。これを発展させた仕組みづくりにもすでに着手されているとのことでしたが、今後は広くその成果が仙台都市圏へ及ぶことが期待できそうです。
評価者②	<ul style="list-style-type: none"> ・ 貴学のキャンパスが統合されると、貴学と異なる本学の特色の一つが色褪せてしまうので、率直に言えば本学としてはつらいところですが、それを離れて地元高校生の立場からすれば、地元により魅力的な進学機会が増えることは歓迎すべきことであることは、まちがいないでしょう。そのことは、本学を含む東北の大学全体、さらには東北の発展全体にとって大きなプラスの効果を持ちうると考えています。 また、地元高校生の立場をも離れていけば、地域への貢献は、地元高校出身者の割合を増やすことだけではないと思います。さらに、首都圏や関西圏からも志願者を呼び込み、地域に優秀な人材を送り出す「東北の雄」として発展されることを期待しております。
評価者③	<ul style="list-style-type: none"> ・ アーバンキャンパスの起工は、コロナ禍の仙台や東北にとって大変明るいニュースとなりました。キャンパスは JR 仙台駅に近く、土樋キャンパスと合わせて交通の利便性も良く、学生にとっては通学自体が楽しく

	<p>なるような立地です。完成後は、ぜひそのコンセプトの通り、地域に開かれたアカデミズムの場を実現していただきたいと思います。</p> <p>貴学は多様な学部から多くの卒業生を輩出しており、著名な企業人も数多くいらっしゃいます。卒業生もアーバンキャンパスの利用を期待しているのではないのでしょうか？</p> <p>卒業生が事業や活動を発信する場や、在学生と地域の企業をつなぐ場としても、可能性があると思います。</p> <p>完成後は、観光面でもキャンパスが活用されればいいなと思います。新キャンパスは新幹線からも容易に確認できるランドマークとなります。大学の施設や食堂、ショップ等も来訪者が楽しめる工夫があるといいと思います。キャンパスツーリズムの取組みとして、学生たちが主体となったキャンパスや周辺のガイドやガイドブックの作成、食堂での東北や仙台らしいメニュー開発や、ユニバーシティグッズの商品開発など、学生たちの実践学習と合わせて、来訪者を意識したキャンパスづくりも、今後の入学生を獲得する上では意識しても良いのではないのでしょうか。</p>
<p>評価者④</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 五橋キャンパス（以下 C とする）のコンセプトとして、起工式において原田理事長様が述べられた「第一：学都仙台を象徴する C」「第二：地域と共創する C」「第三：市民に開かれた C」「第四：新旧一体となった C」「第五：時代とともに成長する C」、そして「土樋 C と合わせて“ひとつの C”として運用していく」という力強い意志表明を見失いことなく、取り組んで頂きたいと思います。 ・ 五橋キャンパスの完成予想図を拝見すると、地域や市民に開かれた建物の配置或は空間の確保が成されています。この様な環境を、施設・学生・市民 と 役割・機能・連携等の活動に繋げて頂きたいと考えます。 ・ コンセプト中でも、「地域と共創するキャンパス」「地域に開かれたキャンパス」については、とても期待致します。地域活動等に若い力や知識を有した学生が参画することは、市民力のアップになるだけではなく、学生自身の考える力の向上につながることから、具体的な展開を図って頂きたい。 ・ キャンパス統合により、文系・理系に拘わらず、学生・院生は学問領域を超えた多様な学びができる様に取り組んで頂き、文理が連携した研究等が進んでいってほしい。 ・ 留学生の受け入れ、また学生の外国への留学については、積極的な展開を考えているとのことですので評価するとともに、具体的内容が公表できるよう進めて頂きたい。 ・ 現下のコロナウイルス感染症の中で、国が積極的に進めているデジタル化に関して、学院大としても今後の取組みを積極的に発信して頂きたい。

<p>評価者⑤</p>	<ul style="list-style-type: none"> 「地域と共創」「地域に開かれた大学」などの理念は、大変共感できる。また、学部ごとの「縦割り」を排し「横串を刺す」との学長の決意にも感銘を受けた。土樋エリアと五橋エリアを、学生たちが行き来しやすいよう時間割などの工夫をしていくことなども確認できた。 このアーバンキャンパス計画は、仙台市の都市計画や民間のオフィス立地や店舗展開などにも大きなインパクトをもたらすものと期待している。学内にとどまらない多様な声を吸い上げ、実現して欲しい。
<p>評価者⑥</p>	<ul style="list-style-type: none"> 令和3年4月入学予定の本校生に聴取したところ、地下鉄出口が近く、利便性が更に良くなるので、講義室等を有料でも貸出してほしい。プロジェクション・マッピングができる空間にしてほしいという意見がありました。単に仙台市中心部の市街地にあるという印象が強まるだけで更に魅力的に映っているようにも感じます。 コロナ禍による授業料収入等の不安定さをカバーするため、当該資産の有効活用や若手ビジネスマン等を対象としたリカレント教育の推進・拡充を大きな特色として打ち出せば、地域貢献、社会連携、広報、生涯教育等々大学全体の更なる発展に繋がるように思います。学生の採用を考える地元企業の印象も向上するのではないのでしょうか。 加えて学生発スタートアップ、いわゆる起業を考える意識や経験を学内で醸成させていくことも必要と思います。起業経験や意識のある学生であれば就職時には評価も高く、将来的に東北地方に求められる起業家の発掘にも繋がるのではないのでしょうか。有力なOB、OG人材を多数抱える貴学であれば、本諸施設の有効活用等で裾野を広げていくことも可能ではないかと思います。貴学からDXを進め、有力企業と情報を共有し、新たなスタートアップや産業の創出を支えていく姿勢も必要で、ビジネスデータサイエンスに係わる文理融合学部の新設なども考えてほしいと思います。今後益々ニーズが高まるデジタル人材の学内における育成も同様で、貴学の特色を存分に活かしながら、社会の求める「尖った人材の育成」を図ってほしいと考えます。

【今後の課題、不明瞭な点の指摘等】

<p>評価者①</p>	<ul style="list-style-type: none"> せんだいメディアテークが定禅寺通りにオープンしたことによって、人の流れが変化しただけでなく、その後建て替えられた周辺の建築物がメディアテークと調和をとった景観をもつものだったり、明確なコンセプトをもつ大規模施設の存在が自主的な地域づくりを呼び覚ますという波及効果もみられました。 新キャンパスの計画や理念はすでにオープンになっていますが、より多くの理解者を増やすことで、類似の波及効果が周辺にうまれることは十分に予想されます。 一方で、泉キャンパス跡地はどのような活用がなされていくのでしょうか
-------------	---

	<p>か？地元の作家伊坂幸太郎さんの小説の映画化の折に、泉キャンパス、周辺地域がロケ地となるなど、地元と大学のつながりもあると思います。やむをえないことではありますが、キャンパスが去った後の地域のことも気になりました。</p>
評価者②	<ul style="list-style-type: none"> ・ キャンパス整備に関してはあまり知見を持ち合わせておらず、具体的なお提案ができないことお詫びします。月並みで恐縮ですが、新キャンパスの実を挙げられることを大いに期待しております。
評価者③	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特にありません。
評価者④	<ul style="list-style-type: none"> ・ 土樋と五橋キャンパスを一体的な「一つのキャンパス」として運用するには、両キャンパス間の歩行者回廊・駐車場等のハード面の計画を、今後、示す必要があると思います。 ・ 土樋・五橋と地下鉄南北線で結ばれた、泉キャンパスの今後の活用計画や位置づけについて、公表できる段階になりましたら示して頂きたい。
評価者⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一番の気がかりは、地下鉄で通学する学生たちが、地域をスルーしてしまうのではないか、ということ。大学は早稲田大と高田馬場エリアの関係のような「学生街」を荒町、連坊に作るイメージをお持ちのようだが、そのように街を育てるのには長い時間が掛かるものだと思う。また、学生がたむろする街は、荒町方面だけではなく、五橋・東二番丁通方面にも作っていくイメージを持ってほしい。学内に地域住民を誘導する仕掛け（開かれた大学）とともに、学生・教職員には「（書を持って（書は捨てなくていいので）街に出よ（街の人々と交流せよ）」と声を大にして言いたい。周辺飲食店への出入りはもちろんだが、一つの仕掛けとして、地域に事務所のある企業へのインターンなども積極的に仕掛けてみてはどうか。 ・ このエリアにある事務所は、本社ばかりとは限らない。弊社（河北新報社）のほかにも、ざっと目に付くだけでも、アイリスオーヤマ、郵政、JR、JT、NTT、リコー、NEC など実に多彩だ。また、ホテルならウェスティンや国際ホテル。ベンチャー企業もある。視野を広く、多様なコラボを構想したい。
評価者⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高等教育研究機関として、その知的インフラとして求められる役割も大きくなりますが、そのアドバンテージをどのように拡大させていくのか非常に興味深いところです。立地状況のその優位性を活かすためには、竣工後のスピード感が強く求められるものと思います。貴学が斬新さを兼ね備えたインパクトある広報（アナウンス）活動を行うことで、様々な波及効果が出てくるように思います。 ・ 高校生は進学先について、コロナ禍により従来以上に地元思考を強めています。また、経済的な負担軽減等から生徒以上に保護者にその意識傾向が強くなっているように感じています。これまで首都圏や関西圏を目指していた成績上位の生徒を入学させる好機とも思います。例えば、仙台市内進学校を中心に出張オープンキャンパスの実施等他大学では実施していない取り組みを考えられてもよいのではないかと思います。

Ⅲ. 2020 年度東北学院大学外部評価委員会の総評

2020 年度外部評価の総評

外部評価委員会委員長 杉本 和弘

1. テーマ A 「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援」

(1) 遠隔型授業の実施プロセスについて

コロナ禍によって大学授業が全面的にストップしかねない状況下、貴学における授業オンライン化に関して、「遠隔授業実施サポートチーム」が果たした役割は極めて大きく、高い専門性に基づいた的確な対応が展開されたことを高く評価したいと思います。学生に対して、「学生のための遠隔授業受講ガイド」を提供したり、メンタル面でもきめ細かなケアを行ったりするなど多角的な支援を進められました。さらに、「東北学院時報」やメディア等を通して授業オンライン化の経過や成果を学内外に発信し、開かれた大学としての姿勢を明確に示されたことも、学生・保護者・地域社会からの信頼を得ることにつながったのではないかと見ています。

しばらくコロナ禍が収束する状況にはありませんが、ポストコロナ時代にもオンライン授業が授業形態として常態化することが予想されますので、今後の課題として、学内の専門的知見やリソースを集約し、21 世紀型の大学教育への転換に図っていける学内体制を構築していくことが必要だと考えます。

(2) 学生アンケートの結果に基づく改善施策について

学生アンケートを実施して学生の抱える課題や困難を丁寧にすくい取られ、その結果を教員にフィードバックしながら改善を図ってこられたことは、大学教育の質保証として重要な取り組みだったと思います。日々状況が変化する中ではこうしたアンケートによる課題把握は有意義であり、学生支援に効果を発揮しただけでなく、遠隔型授業に技術上の不安を抱える先生方の授業支援としても機能しました。かかる取り組みは来年度も必要となるものと予想されますので、是非とも継続的に取り組まれることを期待しています。

(3) 遠隔型授業以外の対応について

過去 1 年のコロナ禍を経験する中で明らかになってきた大学教育の課題は、教育を止めず、その質を下げないことと、そのためにも学生や教職員、なかでも特に弱い立場・不利な立場に置かれた関係者の支援に注力することだと考えています。貴学においても、この 1 年経済や生活に関する支援、授業に係る技術的支援を積み重ねてこられましたので、この経験を基盤に、よりしなやかで且つ頑強な支援体制を構築していただきたいと思います。

2. テーマ B 「東北学院大学アーバンキャンパス計画」

(1) 事業計画に期待する効果、要望等の意見

貴学が 2023 年に向けて推進されているアーバンキャンパス計画は、仙台圏はもちろん、

東北地方全体に与えるインパクトが大きいものがあります。それは地域社会への経済効果にとどまらず、大学進学者の流れ・動きに影響するでしょうから、高等教育進学率の低い東北地方における学習機会の提供としても重要な意味をもつはずで

す。そうした意味からも、アーバンキャンパスへの統合によって、貴学が「教養教育型の総合大学」として「学問領域を超えた多様な学び」を実現しようとしていることは、得てして学部や学問領域によって縦割りの組織構造に縛られがちな大学のあり方を大きく変えていく契機となるものです。インフラとしての「キャンパス」はハードウェアに目が行きがちですが、そこで機能する学部・学科や教職員、そして学生たちが相互作用の中で共創していく教育研究の充実・展開を促進する施策を工夫していただくことを希望しています。これはひとり貴学の課題にとどまるものでなく、日本の高等教育のトランスフォーメーションにも寄与し得るものだと思います。

3. 総評

2019年度から始まった第4期外部評価では、東北学院大学における「教学マネジメント」の運用体制やその課題を評価対象とすることとした。そうしたところ、2020年初頭から世界を席卷し始めた新型コロナウイルス感染症の影響によって社会経済生活自体がままならなくなり、その結果、学校教育から高等教育に至る広い範囲で「学びが止まる」危険性が一気に高まった。2020年度の課題が「コロナ禍」における大学教育に照準することとなったのは当然であり必然であった。それはまた、コロナ禍という不測の事態に対して東北学院大学の「教学マネジメント」がいかに機能し得たかをつぶさに明らかにできる機会ともなった。

こうした問題意識から、2020年度外部評価においては、緊急の導入・対応を余儀なくされた「遠隔型授業」や学修支援の取組状況を中心としつつ、五橋キャンパス起工式（2020年9月4日）を機に本格的に動き出した「東北学院大学アーバンキャンパス計画」についても、書面及びヒアリングに基づく評価（意見聴取・意見交換）を行うこととした。

テーマA「遠隔型授業の実施を中心とした本学の学修支援」に関しては、東北学院大学は2019年度末からすでに学内に専門家を集結させた「遠隔授業実施サポートチーム」を起ち上げている。遠隔授業に必要となるLMSやウェブ会議システム等のサービス（manabaやZoom等）を整備し、急遽遠隔授業を実施せざるを得なくなった教員に向けた支援や情報共有を開始するとともに、さらに学生に対してもIT機器の貸し出しや関連のサポートを行っている。こうした遠隔授業の実施状況については、きめ細かく学生アンケートを行って都度の状況を把握するとともに、学生の学修を支えるべく、経済的困窮者の支援、生活環境やメンタル面で問題を抱える者への支援を着実に展開してきたことも確認された。

総じて、未曾有の事態を前に試行錯誤しながら、コロナ禍における大学の教育学習に対する質保証やマネジメントという点で、大学が一丸となって適切に対処してきたことは評価できるものであり、委員からも高い評価が得られている。他方、今後の課題としては、依然コロナ拡大が収束しない状況下、長くオンライン授業の孤独な受講で孤立感を高めたり、学習のモチベーションを下げたりする学生への対応をきめ細かく図り強化していくこ

と、これまでの取組実績を基盤に新年度における学生支援につなげていく必要性が指摘されている。今後も、是非とも「遠隔授業実施サポートチーム」を中心に大学全体で学修支援体制の強化を進めていっていただくことを期待したい。

また、テーマB「東北学院大学アーバンキャンパス計画」に関しては、東北学院大学にとっただけでなく、東北地方の高等教育にとっても新たな時代を画する明るいニュースとして、委員各位より、今後のさらなる展開に高い期待が語られた。特に、地域社会の活性化やキャンパス近隣の企業とのコラボレーションが進むこと、さらには東北地方における高等教育への進学機会拡大をもたらすものとして期待が高いものがある。今後はさらに、自治体や地域経済界をはじめとした関係者の協力を得つつ、衆知を集めて新たな可能性を切り拓いていかれることを期待したい。

以上

【参考資料】

① 2020年度東北学院大学外部評価委員会 名簿

任期：2019年4月1日～2022年3月31日

No	職名 1	職名 2	氏名	根拠規程
1	委員長	東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教育評価分析センター長	杉本和弘	第5条第1項第1号
2	副委員長	公益財団法人せんだい男女共同参画財団 理事長	木須八重子	第5条第1項第3号
3	委員	尚綱学院大学 学長	合田隆史	第5条第1項第1号
4	委員	宮城学院女子大学 現代ビジネス学部長	宮原育子	第5条第1条第1号
5	委員	仙台市副市長	高橋新悦	第5条第1項第5号
6	委員	株式会社河北新報社 常任監査役	八浪英明	第5条第1項第2号
7	委員	宮城県仙台三桜高等学校 校長	阿部智	第5条第1項第3号

② 東北学院大学外部評価委員会規程

平成20年4月1日制定第6号

改正

平成22年6月1日

平成28年3月22日改正第69号

平成29年12月26日改正第177号

平成30年3月28日改正第39号

(設置)

第1条 東北学院大学（以下「本学」という。）に、東北学院大学点検・評価に関する規程第14条、第15条及び第16条に定める外部評価を実施する機関として、東北学院大学外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、東北学院大学点検・評価に関する規程第4条第1号に規定する点検・評価報告書に基づいて第三者の立場から評価し、本学の教育・研究水準の向上及び組織の活性化に資する提言を行う。

(評価項目)

第3条 評価項目については、東北学院大学点検・評価に関する規程第3条及び同規程別表に定める点検・評価項目に準じて東北学院大学点検・評価委員会（以下「点検・評価委員会」という。）が検討し、学長に提案する。

2 前項の規定にかかわらず、点検・評価委員会による提案及び委員会による評価は、前項に定める点検・評価項目の趣旨を損わない限りで、評価項目を簡略化して実施することができる。

(評価の時期)

第4条 委員会が評価・答申を実施する年度は、公益財団法人大学基準協会による評価を含む外部評価の実施の間隔が2年を超えないように、適切に決定されるものとする。

2 点検・評価委員会は、委員会が評価・答申を実施する年度を検討し、学長に提案する。

3 委員会は、評価・答申を実施しない年度にあっても本学が行っている事業に関する簡略な報告を受けるものとする。

(組織の構成)

第5条 委員会の委員は、次の各号に掲げる者のうちから大学の運営に関する見識を考慮して学長が選考し、委嘱する。

(1) 大学等の教育機関の教員

(2) 経済界の関係者

(3) 本学の所在する地域の関係者

(4) 本学に在職した経験を有する者

(5) 本学の学部を卒業した者又は大学院を修了した者

(6) 前各号に定める者以外に、大学に関して広くかつ高い見識を有する者

2 委員の任期は3年とし、再任を妨げない。

3 学長は、委員を委嘱した場合、委員の氏名、所属等を、速やかに点検・評価委員会に通知するとともに公表する。

4 委員会には、点検・評価委員会委員長のほか、本学の点検・評価に責任を持つ専任教職員が必要に応じて陪席する。

(委員長及び副委員長)

第6条 委員会に委員長及び副委員長1名を置き、委員の互選で定める。

2 委員長は、委員会の業務を統括する。

3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

(委員会の運営)

第7条 委員長は、学長の要請に応じて委員会を招集し、議長となる。

2 学長は、委員会において検討されるべき事項、評価を行う年度等について、点検・評価委員会の提案を参酌して委員会に提示するものとする。

3 委員会は、第2条及び第3条に基づいて行われた評価の結果及び改善を求める提言事項を外部評価報告書にまとめ、学長に提出する。

4 学長は、前項に定める外部評価報告書を点検・評価委員会に提出し、その内容を報告する。

(守秘義務)

第8条 委員会の委員は、この規程に基づく評価を行う際に知り得た事項のうち、秘すべきとされた事項は、他に漏らしてはならない。

(事務)

第9条 委員会の事務は、学長室学長室事務課及びインスティテューショナル・リサーチ(IR)課において処理する。

(改廃)

第10条 この規程の改廃は、点検・評価委員会が発議し、教授会及び大学院委員会の議を経て学長が行い、理事会の承認を得るものとする。

附 則

この規程は、平成20(2008)年4月1日から施行する。

附 則 (平成22年6月1日)

この規程は、平成22(2010)年6月1日から施行する。

附 則 (平成28年3月22日改正第69号)

この規程は、平成28(2016)年4月1日から施行する。

附 則 (平成29年12月26日改正第177号)

この規程は、平成29(2017)年12月26日から施行する。

附 則 (平成30年3月28日改正第39号)

この規程は、平成30(2018)年4月1日から施行する。

③ 2020年度東北学院大学外部評価委員会 議事録（第1回）

2020年度第1回東北学院大学外部評価委員会議事録

1. 概要

会議名	2020年度 第1回 東北学院大学外部評価委員会
開催日時	2020年12月3日（木）15時30分～16時50分
開催場所	土樋キャンパス5号館5階第1会議室および遠隔会議システム ZOOM 併用
出席者 （名簿順）	<p>【対面参加】</p> <p>杉本和弘委員長（東北大学 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター長）、木須八重子副委員長（元公益財団法人せんだい男女共同参画財団理事長）、八浪英明委員（株式会社河北新報社常任監査役）、阿部智委員（宮城県仙台三桜高等学校校長）</p> <p>【ZOOM参加】</p> <p>合田隆史委員（尚絅学院大学学長）、宮原育子委員（宮城学院女子大学現代ビジネス学部長）</p>
委任状提出 （名簿順）	なし
陪席者 （事務局含）	<p>【対面参加】</p> <p>大西晴樹（学長）、菊地雄介（総務担当副学長）、千葉昭彦（学務担当副学長）、中沢正利（点検・評価担当副学長）、村野井仁（文学部長）、前田修也（経済学部長）、齋藤善之（経営学部長）、陶久利彦（法学部長）、岩谷幸雄（工学部長）、水谷修（教養学部長）、稲垣忠（学長特別補佐）、志子田有光（学長室長）、加藤健二（学務部長）、千葉智則（学生部長）、総務担当常任理事（阿部重樹）</p> <p>事務局：石川学課長、本間秀和課長補佐、相澤孝明係長（以上、学長室事務局）、櫻井卓課長、齋藤涉課長補佐（以上、IR課）</p> <p>【ZOOM参加】</p> <p>伊藤寿隆（総務部長）、齋藤吉重（庶務部長）、須田充彦（大学キャンパス整備準備室次長）、栗林野一（広報部長）</p>
欠席者	高橋新悦委員（仙台市副市長）
成立確認	-
配付資料	<p>資料1：外部評価委員会 委員名簿</p> <p>資料2：東北学院大学外部評価委員会規程</p> <p>資料3：2019年度第3回外部評価委員会議事録（案）</p> <p>資料4：テーマAに関する質問内容まとめ</p> <p>資料5：テーマBに関する意見内容まとめ</p> <p>資料6：テーマA・Bに関する根拠資料データ（質問票作成時の提供資料）（資料6内訳）</p> <p>■根拠資料データ（テーマ別/8点）</p> <p>A-①-1_東北学院時報 758号 p1（遠隔授業実施サポートチームの取り組み）</p> <p>A-②-1_【2020年8月3日部長会】大西学長報告（遠隔授業の受講状況に関する</p>

	る学生調査結果) A-②-2_学生のための遠隔授業受講ガイド(2020年9月7日版) A-②-3_FD研修会_遠隔授業の受講状況に関する学生調査報告(2020年9月16日) A-③-1_東北学院大学「新型コロナウイルス感染症対策」学生支援概要について(2020年9月10日) A-③-2_後期授業開始に伴うキャンパス入構手続・検温確認・施設利用等に関するお知らせ(2020年10月1日変更版) B1_1_東北学院時報760号p1(五橋キャンパス起工式) B1_2_東北学院大学アーバンキャンパス計画〈コンセプトシート〉
議長	杉本和弘委員長
司会	中沢正利(点検・評価担当副学長)
書記	学長室 IR 課(事務局)

2. 議事の経過及びその結果

議案	(1) 2019年度第3回外部評価委員会議事録(案)の承認	承認
	・杉本委員長:資料3にある前回の議事録の承認となる。委員会終了までにご確認いただきたい。最後に確認する。	
議案	(2) テーマに基づく意見交換	承認
	テーマA「遠隔型授業の実施を中心とした本学の修学支援について」 ① 遠隔型授業の実施プロセス ・杉本委員長:資料4にあるように遠隔型授業の実施プロセスの中で、オンライン授業の教材作りなど学内で広く活用されたことや評価に値することをご紹介いただきたい。学生への具体策、機器やルーターなどの貸与状況、将来的な準備や対応策についても質問をいただいている。また、遠隔型授業において非常勤講師の方へどのように対応をされたのかも伺いたい。 ・稲垣学長特別補佐:資料4に基づき学生アンケートの結果に基づく改善施策について説明がなされた。まず、授業についていけない学生をどのように見つけていくかは、学習支援システム(LMS:Learning Management System)「manaba course」と結びついた授業を展開しておりmanabaへのアクセス状況を毎月確認し学部長へ報告し対応している。また、アンケートを実施し窮状を訴えている学生には学生総合保健支援センターと協力して対応した。基本的には「遠隔授業実施ガイド」に沿って本学のシステムを利用しオンライン授業を実施するよう教員に依頼した。Zoomでのモデルケースを作成し高い評価も得ている。また、学生に貸与した機器の実数はルーター50台、PC98台となる。ルーターは本学が購入し学生へ貸し出し、PCは学内にあるものを集めて学生へ貸し出した。割合として学生全体の8%強になる。将来的には来年度から、学長からの強いご提案で、学生に一人1台PCを持たせて活用するBYODを全面的に実施する予定である。非常勤講師の先生方については、「遠隔授業実施ガイド」に沿って授業の準備を依頼している。また、前期授業が始まる前に3日間トライアルで教員がオンライン授業を行い教職員が視聴する機会を設け	

た。専任教員も含め約70名の教員が授業を行った。これらに関する準備金として、各教員に一律5万円を支給し授業の準備に使っていただいた。通信環境が整わない教員にはキャンパス内で撮影、配信できるよう教室を貸し出した。manabaには全教員が参加しているオンライン掲示板があり活発に活用されている。

・杉本委員：manabaを利用しインフラをうまく活用している。緊急事態においてもとても丁寧に対応されており、各委員からも高く評価を得ている。

続いて質問6、7について、学生の自宅での受講環境での課題や対面授業を導入した際のオンライン授業とのバランスについてどのような対応を取っているか伺いたい。

・加藤学務部長：受講環境のトラブルは何点かあり、ルーターを貸し出したが学生の住環境がサービスエリア外となるなど、通信大手キャリアの上限50GB無償期間を利用した学生が多くいたが、この期間が終了した後期授業にはWi-Fi環境が整わない学生が出てきてことで、追加で73台のルーターを貸与している。後期授業より対面授業を実施しているが全体の30%程度ほどになる。その後、学生と相談しオンラインに切り替えた授業もいくつかある。対面授業とオンライン授業を混在させたことで様々な問題も出てきており、対面授業の後にオンタイム授業がある学生には学内に受講できる教室を用意し、どの教室が使用できるかを公開する対策をした。通学日を決めたりオンライン授業だけの日を分けて実施したりすることも考えたが合意が得られず難しい状況である。

・宮原委員：宮城学院女子大学でも色々と苦労したが、規模が大きくないので全学で遠隔授業の日を設けることができた。また、1～4学年全ての必修の時間割を見直し学年により見通しをたて対面と遠隔のバランスをみて後期は授業を行っている。遠隔に関しては非同期型の学生がダウンロードして読む授業は時間割で設定している時間以外で受講する形にしているが、学内には学生が遠隔授業を受講できる環境がないので自宅で受講してもらっている。ただ課題の集まりがよくなく、欠席している学生が目立つ状況になってきている。

・八浪委員：対面授業が全体の30%程度に留まっている理由、対面授業を進められなかった原因を伺いたい。

・加藤学務部長：コロナ禍で教室の定員を変えたことで使える教室が少なくなったことや、教員の中にはコロナの状況を見て対面は避けたいという方も多かった。

・八浪委員：コロナの状況により判断が変わったということか。

・千葉学務担当副学長：授業実施にあたり対面授業の人数を上限50人に設定している。対面授業は演習や実習に限定されてくるので、経済学部、経営学部、法学部など人数の多い授業を実施することが難しくなっており、全体で30%程度という状況である。

・杉本委員長：30%程度は善戦されているほうだと思う。東北大学ではそこまでいいいない。

・加藤学務部長：後期授業が始まる前に先生方をお願いしシラバスの書き換えも行い、その結果として30%程度となっている。

・千葉学務担当副学長：資料4に基づき学習成果について説明がなされた。前期の学習成果については、前期は学生も教員も試行錯誤の中で行っていたが、良い面として繰り返し見ることができることでの学習効果など遠隔型授業であるからこそ見出される教育の形が特徴となった。その反面、オンデマンド授業の受講が後へとなり詰まってきてしまい、そ

れに関係し課題提出を求められている学生がレポート提出に疲弊している状況などが課題としてある。そのため後期授業は教員も工夫し対応している。おそらく学生は前期に多くの科目を登録し後期を少なくする傾向にあるが、前期は不慣れなことに科目数が多いことが圧迫していたのではないかと考える。後期は先生方がレポート指導等を行い前期より良くなっている。

合田委員：尚綱学院大学も同じ状況ではある。前期の成績の分布を見ると、成績が良い層の学生は昨年の対面でやっていた時と変わらないか良くなっているが、成績が平均以下の層はかなり崩れてきており、成績にばらつきが目立つ状況にある。後期は出来るだけ対面授業を大事にしようとオンライン授業を継続しながら対面授業を取り入れていき、対面授業は40%半ばになっている。時間割を全面的に組み替え、曜日を指定し学年別に対面授業で登校する日を設け、登校日以外はオンライン授業を組み込んだ。オンデマンド授業は曜日を指定して受講するよう指導している。

・杉本委員長：学生アンケートの結果に基づく改善施策について、特に1年生はキャンパス生活の経験がないので孤立しないようどのようにフォローしたのか、授業以外の学生生活の機会をどのように確保されたのか。また、全学FDと学部FDとの関係について伺いたい。

・千葉学務担当副学長：特に一年生に対しては、通常であれば入学してすぐにオリエンテーションがあるが、今年度は開催されなかった。夏休み前にオンラインでグループ単位のオリエンテーションを行った。後期は少人数での対面授業が始まり大学に来る機会が出来たが、週1回と会う機会が少なく友情関係を築くのに難しい状況にあり、来年度の大きな課題となる。来年度は感染予防をしながらもう少し広げていきたいと考える。キャンパスライフや学外での生活は悩ましいところではあり、特に1年生がキャンパスライフを送っていないことに苦慮する。良いアイデアが出てこないのが現状ではあるが、何かをしたいとは考えている。あと、全学FDと学部FDの位置づけは、どちらが上とか下ではなく役割が違い、全学FDはまさに全学であり、先生方に遠隔授業のバージョンアップを図る機会を設ける等全学的な取組みを扱うのが全学FDである。学部FDは、それぞれの学部の固有の問題を各学部の中で取り扱い、授業の内容ややり方などを扱っている。

・阿部委員：高校も休校をしたことで転学や退学など進路変更する学生も多く、特に1年生は高校生活に慣れず学校行事もなく学生同士親しくなれなかったが、10月の体育祭を機に堰を切ったように親しくなり学生生活に慣れてきた状況である。高校は現在通常通りに授業を行っているが、大学では対面授業がまだ出来ない状況に大変なご苦労があると思う。もう一点、休業期間中の遠隔授業を高等学校でも行ったが10%の学校しか満たなかった。やらざるを得ない状況での対応で教員のレベル感の違いや生徒のICT環境の違いなど難しい問題もあった。課題として生徒の集中力をいかに維持させるか、生徒のリアクションをいかに引き出せるかに焦点をあてながら対面とオンラインの統合で付加価値が付けられる学習機会を提供していきたいと考える。大学生とは環境は違うが、貴学が着実に取組まれており勉強になった。

・稲垣学長特別補佐：本学の取組みに関しては相互方向性の重視を一番大事にしており、配信であってもリアクションを返すことや呼びかけを行うことで相互性を大事にしてきた。また、manabaを活用し学生間のコミュニケーションを取れるようにしている。

・杉本委員長：FDには非常勤講師も参加されているのか。また、教員側のスキルアップにより解決できることがあるのか。

・中沢点検・評価担当副学長：FDには非常勤講師は参加依頼していない。費用がからむので自由参加であれば良いがお願いをして参加はしていない。非常勤講師のサポートは大事なことで、manabaの掲示板で相談や質疑応答ができるようにしており、各学科の中でサポートを行っている。後期はFD研修会の動画をmanabaで自由に見られるようにし問題解決できるよう工夫し、引き続き非常勤講師のサポートをしていく。教員のスキル格差があるのはその通りであり、それに対し苦情もある。バットプラクティス教員も居るので学部長を通じて改善をお願いしている。後期に関してはハイブリット形式に変わっており、授業形式が混在し学生たちが混乱してくるといふ新しい問題も出てきており、学部長を通し先生方に改善をお願いしているところである。

杉本委員長：非常勤講師に関しては以前からFDに関する問題はあるが、むしろオンラインを使うことで機会が担保されるものだと思う。

・宮原委員：宮城学院女子大学のFDには非常勤講師は現在参加していないが、前期の遠隔授業導入にあたり多くの非常勤講師の方から大学により使用システムが違うので操作方法が混乱していると話がある中で、FDとまではいかないが遠隔授業の勉強会を非常勤講師にもオープンにして専任の教員と共に色々な事例を学んでもらい意見交換する機会を設けた。非常勤講師にとって精神的に孤立していないという心強さがあったと思う。

・杉本委員長：学生生活が大きく変わる特に1年生の問題があるかと思う。先程説明もあったが何か付け加えることがあればお願いしたい。

・千葉学務担当副学長：なかなか難しいところではあるが、各学部において少人数の授業では積極的に対面授業を行い、来年度に関しては対面授業の人数の上限を引き上げることを考えている。

・木須委員：高等教育の取組みに相当ご苦労されていることがわかった。子供たちの義務教育から大学までの一連の教育にどのように繋がりながら社会でサポートしていくか考えていた。高等教育にいけばいくほど環境が整っており希望の光が見えた。教育だけでなく環境、ソフトの面に期待を寄せている。

・杉本委員長：変化しながらの対応で難しいが、一番重要なのは新しい時代が変わっていく中で知見をひとつずつ蓄積させていくことであり、新たな学び方、新たな教え方を積み重ねていくことである。

最後の遠隔授業以外の対応として、奨学金制度、学生からの相談、学生や保護者から意見を聞く機会、経済的支援、健康面やメンタル面の支援、授業以外の学生生活（サークル・部活）への支援の対応を伺いたい。

・千葉学生部長：奨学金については、本学は全て給付型となり返済は卒業後となり、返済に関して問題はない。学生からの相談については、学生総合保健支援課に相談室があり、2019年度は10月末までで760件の相談があったが、今年度は269件と大幅に減少しており対面ではないということが起因しているかと思われる。相談内容については、学生生活、人間関係についての相談が多く、昨年度との違いで言うと、就職キャリア支援課へ就職活動の相談が多く寄せられている。就活に絡んで精神的に不調をきたす学生が出てきている。就職キャリア支援課と学生総合保健支援課とで連携し、そういう学生へ対応している。退

学者については、2018年度2019年度とも約190名程度であったが、今年度は140名と全ての学科で減少している。現在1年生では7名の退学があるが経済的困窮での退学が多くなっているという訳ではない。学生や保護者からの意見を聞く機会については、学生に対し6月にGoogle formを用い学生の生活の現状、心身の健康の状況や必要な支援を中心に簡単な調査を行った。6月に学生総会をZoomで行い、学生の意見を聞いた。特に健康・食事に関しての不安を訴えていた学生もいたので、3キャンパスでランチを通常500円のを200円で学生に提供する取組みを行っている。経済的な支援についてはかなりの指摘を受けており、特にコロナに対応する形で、緊急給付金という授業料の半額を給付するもので収入減に対応する給付金を受給しやすいように制度を変更している。例年20名に給付しているが今年度は50名となり、今後も増えていくと考える。

保護者への対応は学生部では行っていないので、総務部長から回答していただく。

・伊藤総務部長：今年度は保護者会の行事は全て中止となり、総会は書面の議決をし、その際アンケートを行った。特に1年生の保護者から多数の意見を寄せられた。半数は進路や成績に関する質問だが、半数はコロナでこれから先どうなるのか不安だという声をいただいた。秋には学務部、学生部、就職キャリア支援部の担当者によりZoomでオンライン相談会を行った。馴染みがないのか10件程の相談ではあったが、実際に具体的な事柄について担当部署とやり取りすることが出来た。

・千葉学生部長：経済的な支援については、本学では大きく3つ用意している。一つは休業要請に対する支援として10万円を145名の学生に対し給付を行った。続いて家計急変等に対応する緊急給付奨学金に関しては授業料半額を給付するもので50名に給付している。また、30万円の給付奨学金も用意しており前年度100名であったが、今年度は前期100名、後期100名と倍増し200名に給付を行っている。給付奨学金に関しては申請者が650名ほどいて経済的支援を必要とする人はまだ多くいる状況であり本学としては可能な限り支援をしていく考えである。健康面やメンタルな相談については150件あった。全体の20%となり昨年度より増加傾向である。相談件数が増えてきており深刻になってきているが、鬱や自殺を考えている学生の割合は例年5%だが、今年度は特に増えているわけではないと報告を受けた。課外活動は6月から段階的に認めてきており、7月から全国大会出場団体には通常取り旅費等を認め出来る限り例年通り活動できるように支援をしている。また、9月の対面授業開始前に新入生オリエンテーションプログラムをオンラインで開催し、学科の先輩と新入生の交流や学生間での交流を、manabaを利用し実施した。10月には大学祭をオンラインで実施し、また同時に対面で課外活動団体の新入生歓迎会を実施した。新入生に対し課外活動の紹介を行いながら上級生と新入生の交流を持つことができた。

テーマB「東北学院大学アーバンキャンパス計画について」

・杉本委員長：新たな時代を画するものなると考える。たくさんのご意見があるが、キーポイントをご説明いただきたい。

・大西学長：資料5について説明がなされた。キャンパスを今後どのような位置づけにするのか、学問領域を超えた多様な学びをどのように実現していくのか、その仕掛けはどのようにするのかということですが、2023年から五橋に移転し、共同教育センターという全学部の教養科目（共通科目）を担当する教員組織を作る。132～4単位のうち36単位を主に

そこが担当で進めていく。同時にプラクティス組織について、縦割り組織をどうするか、各学部に自治が認められていたが、全学教育機構という横串をさした。この形で配置科目の是正、学部を超えた科目の乗り入れ、教育科目の整理統合、質保証、教育方法や規律、そういったものを全学教育機構で議論し進めていき統一性を持たせる。地域に開かれた大学ということですが、本学は長いこと6学部で構成していたが、学問を深く教えることは出来るが地域のニーズを汲んだ取組みについては学問先行で乖離していた。これからは、情報、地域、国際など複合的学問分野に注力し地域のニーズに応える大学を目指していく。リカレントに関しては、都心のキャンパスであるのでこれまでの教養教育の伝統を活かしながら公開講座を継続していき、他方で社会人大学院生が必要としている専門性資格を導入した資格課程の学びにも注力していきたい。学都市としてのリカレントを果たして生きたい。産官学の連携ということですが、4年間COCやCOC+の拠点校の役割を果たしてきたが、昨年度で終わってしまった。政府は地方国立大学を拠点として地方創成を掲げているが、本学としてはこれまでの系統を活かして産官学の地方連携を進めて行きたい。そのためのプラットフォーム作りをし、年内にも締結式を行いCOC+の事業を超えていくような連携事業を行って行きたい。具体的には宮城県、仙台市、県内9大学、七十七銀行、仙台銀行、商工会議所の協力を得てプラットフォームの締結式を年内に行う。学生の参加ということですが、共同教育センターの授業では課題探求型の授業や演習がある。キャリア形成、地域課題やボランティアの授業や演習ではむしろ地域から学び、地域の協力を活かした地域と一体となった授業やゼミを行うことを目指している。五橋キャンパスが未来型とするならば、土樋キャンパスは東北学院の歴史を伝えるキャンパスとなる。学部等の配置を偏ることなく一体型の利用を考えていく。例えば授業時間をゾーン化して全学部共通科目を午前中に行うとか、出来るだけ学生や教員の往来を少なくしキャンパスに滞在する時間を長く作るような工夫をしていく。大学というのは企業が求める効率化になじまないものがある。学生が語らいたむろする場所が必要である。もちろん市民やマスコミとの交わりの場である未来の扉というからくりを作る。そこで地域との連携やスタジオを介してマスコミとの連携を進めて積極的に作っていくことを考えている。反面、近くにはラーメンで有名な荒町商店街があり、学生街が再び復活する気配がある。サブカルチャーな街が自然発生的に生まれてくることを期待している。デジタルについては、先程教学の面で説明もあったが、はからずも私たちは5年先に進んでしまった。学生たちがBYODを出来る体制ができたということで、このコロナ禍の中でいとせずしてBYODの環境が生まれたことをプラスに活かしてオンライン授業を継続していくと共に、2021年度からはBYODを義務化し、2022年からは学生本位の教育、教育の質保証を可視化するe-Portfolioの導入を考えている。それと同時に全学生に全学共通科目として情報リテラシーを必修化し、すでに東北大学でも始まっている学生のボリュームゾーンである文系の学生にも分かるような統計学、AIやデータサイエンスについて地域との繋がりの中で学べるような仕組みを考案中である。留学生に関しては、積極的に受け入れ日本人学生を送り出す仕組みを構想中であり、具体的になったら公表したいと思う。

・杉本委員長：ご説明いただきありがとうございます。委員の方何か質問がありますでしょうか。

・委員一同：なし。

議案	(3)その他	承認
<p>・杉本委員長：その他の議案がないことを確認し、議事録の修正個所があれば連絡いただきたい。特になければ承認されたものとする。</p>		

3. 次回予定

開催日時	2021年3月
開催場所	未定
報告(予定)	未定
議案(予定)	未定

委員長は議事の終了を宣言し、16時50分に閉会した。

以上

2020年度 東北学院大学外部評価報告書

発行日：2021年3月19日発行

編集・発行：東北学院大学外部評価委員会

問合せ先：東北学院大学外部評価委員会事務局

学長室インスティテューショナル・リサーチ（IR）課

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1

TEL 022-264-6424 FAX 022-264-6364

E-Mail tgir@mail.tohoku-gakuin.ac.jp